（研究ノート）　研究紀要第 78 号

連続講座「友達を描く」の研究授業を含めた実施報告

辻 野 栄 一 *

Implementation Report including the Open Class of the Continuous Course "Drawing a Friend"

Eiichi Tsujino

要約

本稿は、2021 年度保育学科・後期授業「保育職基礎演習 II」の授業計画にある連続講座（前期）の授業実施報告である。3 回の授業で完結する連続講座の初日は、2021 年度第 2 回保育学科研究授業として設定した。その研究授業を中心としている。

当該授業のテーマ「友達を描く」は、かつて幼稚園で行われたことのある活動を著者が学生用にアレンジして実施した。初日の研究授業では、モデルと描画者が交代しながら、鉛筆を使用した線描画の下絵を製作した。そして、研究授業後の検討会では、参観教員との意見交換が行われた。後の 2 回の授業では、水彩絵の具を使って着彩し、作品を完成させた。それら連続講座 3 回の授業を振り返り、検討会での意見や助言を踏まえて、授業内容や手法等の考察を行い、今後の方向性についてまとめている。

キーワード：造形表現、保育職基礎演習、連続講座、研究授業

This paper summarizes a series of lectures in an Early Child Care Education: Basic Seminar II in 2021. The series consisted of three lectures. The first lecture consisted of the 2nd Childcare Department open class in 2021. This report covers that first lecture, which was an open class.

The theme of the lecture was, "Draw a Friend," and was an activity that was once done in kindergarten. In the open class on the first day, students took roles as models and painters, and took turns creating a line drawing sketch using a pencil. At the review meeting after the open class, an opinion exchange was held between the instructors who observed the class and the instructor (author). In the two classes that followed, the students completed their works by coloring them with watercolors. This report looks back on these three consecutive classes, examines the contents and methods of the classes based on the opinions and advice of the study group, and summarizes the future direction of study.

Key words : Artistic Expression, Basic Seminar, Series of Classes, Open Class

受理年月日：2022 年 7 月 29 日　*高松短期大学保育学科教授

１．はじめに

保育学科では、保育学生として保育実習・幼稚園教育実習で実りある学びにするために、1 年時に「保育職基礎演習Ⅰ・Ⅱ」という授業がある。前期・後期に開講され、専門職保育者に必須の基礎的かつ総合的な資質能力を 1 年時において系統的に学ぶことを教育目標としている。

後期開催の「保育職基礎演習Ⅱ」の中には、「連続講座」がある。学科の教員 12 名がそれぞれの専門分野で講座を開き、3 回で完結させる授業である。入れ替わり制で前期と後期に 2 度行われ、受講する学生は受講希望のアンケート調査により各講座に振り分けられる。

著者が担当する連続講座は、「友達を描く」をテーマに授業を展開した。初日の授業では、2021 年度第 2 回保育学科研究授業として設定し、保育学科教員が参観する中で開催された。

２．授業概要について

当該授業のテーマ「友達を描く」は、等身大の友達を描くという内容である。以前、ある幼稚園で 5 歳児に対して行われた活動を、学生用にアレンジして行った。2021 年春に当短大に着任した著者にとって、このテーマで大学生に対して行う活動としては初めての試みである。

美術の世界では、通常モデルとなる人を前に立たせて、観察しながら写生をすることをよく行う。しかし、ここでは描く対象がペアを組んだ友だちで、しかも等身大の大作を製作する。大きな画用紙の上で、モデルとなる学生は寝転がりポーズを取る。描画者はそのモデルの外側をなぞりながら輪郭線を描いていく。モデルは描画者に、描画者はモデルに交代しながら描画を進める。連続講座（3 回）の初日は、鉛筆を使って線描画で下絵を描き、後の 2 回の授業でアクリル水彩絵の具を使って着彩して完成させる。

３．連続講座（前期）「友達を描く」の授業及び検討会の日程

①連続講座 1 日目

【研究授業】

授業内容：鉛筆による下絵作成

日　時：2021 年 11 月 2 日（火）5 校時　16：20～17：50

場　所：2104　図画工作室 2

受講者：保育学科 1 年生 4 名

聴講者：保育学科教員 10 名

②連続講座 2 日目

授業内容：水彩絵の具による着彩　衣服等の着彩

日　時：2021 年 11 月 8 日（月）4 校時　14：40～16：10

場　所：2104　図画工作室 2

受講者：保育学科１年生４名

③【研究授業の検討会】

日　時：2021 年 11 月 9 日（火）5 校時　16：20～17：50

場　所：2104　図画工作室 2

参加者：保育学科教員 8 名（著者を含む）

④連続講座 3 日目

授業内容：水彩絵の具による着彩　仕上げ

日　時：2021 年 11 月 15 日（月）4 校時　14：40～16：10

場　所：2104　図画工作室 2

受講者：保育学科１年生４名

４．連続講座１日目（11 月 2 日）研究授業の内容について

４．１ 準備

事前準備として、使用する図画工作室 2 に設置されてある作業台を両脇に寄せてスペースを作り、ブルーシート（5.4×7.4m）を一面に敷き詰める（写真 1)。その上に 2m20 ㎝に切った幅１mのジャンボロール画用紙 4 枚を間隔を空けて仮止めする。そして、鉛筆（4B)、鉛筆削り、消しゴムも用意する。

学生たちには、事前に「友達の絵」を描くので、絵が華やかになるように地味な服装ではなく、できるだけカラフルな服装を着て来るようにと伝えておいた。

写真１　準備風景

４．２ 導入

今回、研究授業として設定しているため、保育学科教員 10 名が、図画工作室の後方で聴講する中で学生 4 人が受講した。

モニターの見えるホワイトボード前に集合させ、パワーポイントで授業タイトルの「友達を描く」の文字を投影して見せる。そして、写真 2 のように年長の幼稚園児がクレヨンで描いた参考作品を学生の前に提示し、「等身大」の友達の絵を描くことを伝えた。過去にこの活動が行われた幼稚園で、それぞれの園児が描いた「等身大の友達」の絵が一堂に貼られて公開されたイベントでは、保護者から大変好評であったことを付け加えた。

写真 2　参考作品の説明

４．３ 課題説明

通常小学校等では、モデルを前に立たせて写生をする。しかし、今回は、画用紙の上でモデルとなる友達が寝転がりポーズを取っている姿そのものの輪郭を描いて等身大の作品を製作することを説明した。また、今日の活動は、鉛筆で下絵として輪郭線や顔や手、服のしわや模様等を描くことを目的とした。

今後の連続講座を通してアクリル絵の具を使って着彩まで行う。クレヨンとアクリル絵の具で使う材料は違うが、この体験を通してぜひ保育現場でも活動として取り入れ、開催して欲しいことを伝えた。

４．４ 作業手順の説明

パワーポイントを使って、作業手順について説明した。過去に著者が、坂出市勤労福祉センターにおいて 10 組 20 人の小学生を対象に行ったワークショップの画像等を説明素材として使った。

【作業手順】
（1）ペアを決める
（2）モデルはポーズを決める
説明資料に使ったワークショップの様子は、イベントとして半日をかけて、下描きから着彩まで通しで行った際の画像である。しかしこの連続講座は、3 回の授業に分けて下絵から着彩まで行う。そのため、描画者はそれぞれのスマートフォンを使って、できるだけポーズを取っているモデルの上から写真を撮って保存しておくように指導した。後日着彩する際に、写真で再確認しながら絵を描くこととした。
（3）輪郭線を描く
幼稚園での活動では、画用紙に直接クレヨンで輪郭線を描かせるのが良いが、ここでは濃いめの鉛筆（4B）を使って、下絵ではあるが薄く描くのではなく、しっかりとした線で強弱を付けながら描くよう伝える。
（4）描画者、モデルの交代
役割を交代して同様の作業を行う。輪郭線を引き終わると再び描画者はモデルに、モデルは描画者に交代する。
（5）輪郭線の内側を描く
先程引いた輪郭線の内側を観察しながら克明に鉛筆で描いていく。陰影は付けない。
（6）描画者、モデルの交代
（7）着彩
後日 2 回の授業で水彩アクリル絵の具を使用して着彩し完成とする。

４．５ 長所短所の説明

この課題を実施するにあたり、長所、短所について以下のように説明した。
【長所】
・モデルが立ってポーズを取るのであれば、ポーズに制約がある。また、長時間ポーズを固定して静止するには、疲れてバランスが変わったり動いてしまったりする。しかし、寝転がってポーズを取るのであれば固定が容易で、動きのあるダイナミックな大作ができる。
・友達と相談の上でポーズを決めたり、交互に役割を交代したりすることで、友達とのコミュニケーションが生まれる。
・モデルを前に立たせて描くのでは、頭や肢体のバランス良く表現するのは難しいが、モデルの身体をそのままなぞっていくので、身体のプロポーションを容易に表現できる。
・輪郭線は、なぞって描くだけだが、顔や手、衣服のしわ等を描く際には、対象物をよく観察して描かなくてはならず、集中力も養うことができる。
・大作となるので完成した時の喜びや達成感を得ることができる。
【短所】
・大作となるために大空間が必要となる。

・広い空間を使って作業をするためにシートを広げたり、大きな画用紙、水や絵の具を準備したりすることが大変である。
・完成させるまでに長時間の作業(3.5～4 時間）となるため、集中力を切らさない工夫が必要である。

４．６ 活動

授業概要、スケジュール等の説明後、学生たちの活動に入った。

（1）ペアを決める

4 人の学生で相談して、ペアの 2 組に分かれ、どちらが先にモデル、描画者となるかを決めさせた。

（2）ポーズを決める

写真 3 のようにモデルとなった学生は、画用紙の上で寝転がりポーズを決める。楽にポーズが取れて、立ちポーズと違い制約が少ないため、できるだけ動きのある大胆なポーズを取るように指示をした。

また、長期にわたるコロナ感染症の蔓延防止のために、描画者、モデルの双方がマスク着用を義務付けられた中で活動した。しかし、描画者が顔の部分を描く際は、無言でもあるのでマスクを取るように伝えた。

写真 3　モデルのポージング①

（3）輪郭線を描く

モデルとなった学生は、ポーズを取った姿勢をできるだけ動かさず身体を固定しておく。描画者は、モデルの身体や衣服の外側をなぞるように鉛筆で輪郭線を描く（写真 4)。手の指の部分についても細かく正確に輪郭線を引いていく。できるだけ上から見て、鉛筆を垂直に立てて描く。恐れず自信をもって濃く勢いのある線を引いて描くように伝えた。

写真 4　輪郭線を引く

（4）描画者、モデルの交代

一通り身体の輪郭を引き終わったら、描画者とモデルが役割を交代し、新しいポーズを取る（写真 5)。描画者は、先程と同様にモデルの外側をなぞり、輪郭線を描く。輪郭線を描き終わると、再び描画者とモデルが役割を交代する。

写真 5　モデルのポージング②

（5）輪郭線の内側を描く

写真 6 のようにモデルは、画用紙から移動し、横のブルーシートの上で再び同じポーズを取る。描画者は、そのモデルを真上から観察しながら、顔、髪の毛、手足、衣服の縫い目やしわ、衣服に書かれてあるロゴタイプ等の詳細を鉛筆で描き加える（写真 7)。また、しわや丸み等の影は、着彩時に付けていくので、ここでは、線で表現することを伝える。

写真 6、写真 7 のように、描画者、モデルの双方がマスク着用を活動していたが、描画者がモデルの顔を描く時のみ、マスクを外してもらって顔の表情を描くこととした。

また、先程輪郭線を描いた際に鉛筆を垂直に立てて線を引かず、内側に角度を付けて描いたために腿の部分が異常に細かった部分や、外側に角度を付けて描いたために手の指がグローブのようになっていた部分は、修正するように指示をした。その修正が不十分な個所や足の長さのバランスが悪い箇所は、筆者が一部修正を加えて整えた。

写真６　輪郭線の内側の描写①

写真７　輪郭線の内側の描写②

（6）描画者、モデルの交代

描画者とモデルが役割を交代し、モデルとなった人は、横のブルーシートの上で再び同じポーズを取る。描画者は、輪郭線の内側を克明に描いていく（写真 8)。ここでもできるだけモデルの上から見て、そのイメージを画面に描くよう伝えた。

写真８　輪郭線の内側の描写③

（7）下絵の完成

写真９のように鉛筆による下絵の完成とした。

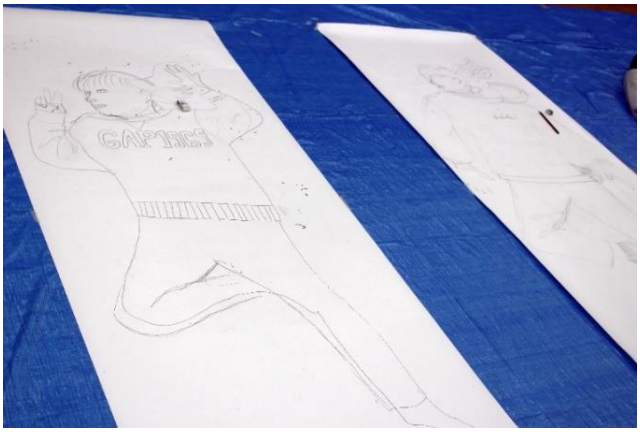

写真９　下絵の完成

（8）鑑賞及び講評

できた作品に対してそれぞれが他の学生の作品を鑑賞する時間を取った（写真 10)。そして、一人ひとり感想を聞いた。「大変だったが、楽しかった。」「線を描くのが難しかった。」「こんな大きな絵を描くのは初めてだった。」等の意見が出た。

その後、この活動を幼稚園で行うには、どのようなことに気を付けなければならないかの質問をした。しかし、残念ながら学生たちからは、描画が終わった緊張からの解放と、研究授業で先生方が見ているという意識によって、明確な意見を引き出すことができなかった。

そこで、筆者から幼稚園児にこの活動をさせるのであれば、描き慣れたクレヨンで線を引かせることが良い。また長時間集中力を保つのは難しいので、作業の進行を見計らい、時間を切って、モデルと描画者を交代させながら描かせると良いことを伝えた。

写真 10　作品鑑賞

（9）後片付け

次週着彩をするために各学生が描いた作品を丸めながら閉じていった(写真 11)。そして、ブルーシートを床に留めているテープを剥がしながら折り畳み（写真 12)、後片付けをして授業終了とした。

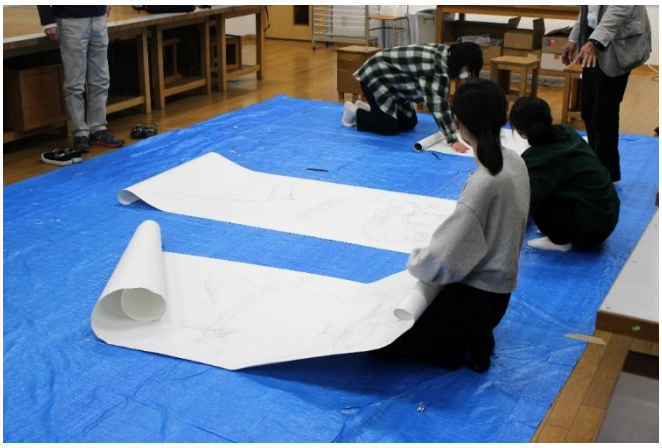

写真 11　後片付け①

写真 12　後片付け②

５．連続講座２日目（１１月９日）の授業内容について

２日目からは、それぞれの学生が、作業台の上に前回描いた下絵を広げて、アクリル水彩絵の具を使用した着彩作業に入った。現代のアイテムを利用して、初日の下絵作業でポーズを取っている姿をスマートフォンで写真撮影しておいた。その画像を見て、色や陰影等の詳細を確認しながら着彩していった。作品画面が大きいため、広い面積の衣服から着彩を始め、絵具を大量に使用するために、学生が持参しているアクリル絵の具（チューブ）ではなく、ボトルのアクリル系エマルジョンを配合した耐水性ポスターカラーを使用した。

冒頭、学生たちが広い面積を刷毛で塗ることが初めてで感覚が分からないために、明るい色の部分から始め、絵具に対して水の分量を多めにして薄く調子を見ながら塗っていった。その後、暗い部分を意識して徐々に濃い色を塗り重ねて色調に深みをもたせた。この水彩絵の具は、乾くと耐水となり塗り重ねられるので、乾燥させながら塗り重ねていった。乾燥させる間は、他の部分を着彩して進めていった。細部は、平筆や面相筆を使い、衣服のしわの陰影や服の模様に注意させながら、丹念に塗り重ねる（写真 13・14）。服やパンツのしわ、丸みの陰影等を意識した学生は、暗めの色を調合して、色の違いや立体感を表現していた。作業の早い学生は、顔の肌の色も塗り始めた。

写真 13　着彩①

写真 14　着彩②

６．連続講座３日目（１１月１６日）の授業内容について

最終日となる 3 日目は、仕上げとなる細かな部分の着彩を行った。顔や手の詳細（写真 15）や服のロゴ（写真 16）等をアクリル絵の具で面相筆を使って描いていった。

写真 15　着彩③

写真 16　着彩④

顔の目、鼻、口等の詳細は、どのようになっていたのかの疑問を持って、再度モデルとなる友達の顔で再確認したり、写真と見比べながら描いたりして修正することが理想であると指導したが、誰も見比べることもなく前回描いた輪郭線に従って塗っていたのが残念であった。

以下の 4 点（写真 17・18・19・20）が、完成した作品である。ポーズを決める際、研究授業で教員が後ろから参観していたことで、恥じらいから目を合わさないように、4 人とも顔が左向きになっている。今回、3 週に分けて描いたために、それぞれ準備や後片付けをする時間が取られ、もう少し時間をかけてじっくりと立体感や細部までこだわった表現ができれば良かったと感じている。

個々の作品の講評として、写真 17 は、直立したポーズが残念だが、服やパンツのしわを描き、立体感を表現しようとする試みが強く感じられる。足先やかかとの形を捉えるのは難しいが、輪郭線としてなぞることで克服されている。写真 18 は、陰影のない衣服のべた塗りが気になるが、このような大作では特に、頭でっかちになったり、短足になったりしがちなプロポーションがバランス良く描かれている。写真 19 は、手足を曲げて弓なりにレイアウトされ、4 人の中で一番動きが感じられる作品である。この課題をモデルが最大限に活かしたポージングとなっている。また、モスグリーンの濃淡の違うチェック柄の服がよく表現されている。写真 20 も、手を挙げ、足の膝を曲げた動きのあるポージングである。あごの部分に陰影を付けて、目鼻口の顔の表情が自然に描かれている。

今回受講した学生は、複数で共同作業によって大きな作品に取り組んだことはあっても、個人で取り組むのは初めての大作となった。学生たちにとって貴重な経験であり、やりがいを感じてもらえたのではないかと思う。

写真 17　作品①

写真 18　作品②

写真 19　作品③

写真 20　作品④

７　検討会・授業参観記録における意見及び考察

研究授業終了の一週間後（2021 年 11 月 9 日 5 校時）となったが、保育学科教員 8 名（著者を含む）の参加のもと検討会が行われ、本授業の振り返りと協議を行った。その検討会で協議された内容及び参観者から後日提出された「授業参観記録」の内容（評価できる点、改善点等）について記載し、それらのコメントに対する考察も含め以下にまとめた。コメントの項目については、本学所定の「授業参観記録」の様式に従っている。

７．１　積極的に評価できる点

〈1-1 教育内容〉

・印象的な教材だった。学生にとっても、恐らくほとんど経験したことがないような、ダイナミックな製作経験になっただろうと思う。

・保育現場で実践できる内容を実際に経験する機会となったと思う。また、これまでにない経験をすることで、表現技術の多様性を学ぶ機会にもなっていたと思う。

・おそらく学生には体験したことのない内容で、期待の高まる内容だった。知識偏重とも思えるカリキュラムの中で、受講生たちにとって大きな刺激になったと思う。

・友達と関わりを持ち、コミュニケーションを取りながらの楽しい取り組みであった。

・学生との自然なやり取りができており、私にはないところで参考になった。

・今後、保育現場で取り組んでもらう活動であった。

・実物大の自分を描くことは、幼稚園やこども園等の保育現場においても、今までに保育参観日の親子ふれあい活動として取り入れたり、修了・卒園前に年長児の作品として製作して、

式場や廊下に展示装飾をしたりしたことがあった。このことから今回の授業は、保育の内容として学生のレパートリーを増やすことや技術面の習得という両面から考えられており、現場で活かせる保育力の向上という意味からも大変勉強になった。
・過去に幼稚園で同じような等身大で描くイベントがあったが、その際は親子がペアになって行われた。
・学生にとって「注意深く観察することなしには描けない」経験であった。描画だけではなくどんな場面でも五感が大切で、すべて注意深く見る・聴く・・・から始まると思っているのだが、それはなかなか学生に伝わらない。具体的にそれが体験できる貴重な場を提供してくれたことに感謝したい。
・等身大で描くからこそ、「目の前の対象をよく観察することの意味」を学生は理解しやすかったかもしれない。学生からの「うまい」「上手」という感想は、お茶を濁す言葉でも、お世辞でもなくて、心から自然と出たものであったように感じた。「技術」がどのように発揮されるのかを実感していたのではないかと思う。

〈1-2 授業内容〉
・映像や見本の提示により、自分なりにイメージをもって製作に取り組めていたのではないかと思う。
・話の内容が分かりやすいため、学生たちにすんなりと伝わっていたと思えた。目標が明確に提示されたことによって、受講生はこの時間にすべきことが明確になっていた。
・教室に入った時に準備されていた大きな白い用紙。学生にとっては、授業に対する期待感が大きく高まったことと思う。「何が始まるのだろう？」というワクワク感は、子どもの創造力を高めることにとって、とても重要な原動力になると思うので、学生も子ども目線に立って考えられる
・素晴らしい教材提供の方法だと思った。
・聞き取りやすい声で、丁寧に説明されていた。
・少人数の 3 回講座でなければ実現しない活動が選ばれていたと思う。等身大では、プロポーションのバランスをとるための方法として寝転がって輪郭という方法が一番速いことを実感した。
・子どもの作品例を見せてくれたことで学生もイメージしやすくなった。
・教室の準備が大変だったと思うが、活動にふさわしい空間だったと思う。

〈1-3 その他〉
・辻野先生と学生のやり取りを見せていただく中で、自然な言葉の交流やさりげないサポート等、技術の習得には、個別で丁寧な関わりが重要であることが、より強く感じられた。

７．２ 授業改善に関わる点

〈2-1 教育内容〉
・保育現場で活かすことができる授業内容であり、学生にとって極めて有意義な内容であると考える。教員のこれまでの経験が生かされており、実務経験を積んだ教員らしい授業内容であった。
・美術の授業は演習形式であり、学生は楽しみながら受講しているように感じられる。保育の勉強って難しいなあと挫折しそうな時期である１年後期に実施する内容として相応しい。
・受講生たちの自発性がもう少し欲しかったと思う。これは先生に起因することではなく、私の授業でも感じられることだ。実習先でも「指示されたことをきちんとこなすが、もう少し積極性が欲しい」と何度か言われたことがあり、学科全体の問題かもしれないが、音楽の授業においても学生たちの自発性＝表現したいという気持ちが少ないことに常々問題を感じている。上から押さえつける教育が原因のひとつと考えられる。

〈2-2 授業方法〉
・学生の性格や今回のパートナーとの友達関係等もあったと思われるが、何を、どのようにということが理解できていなかったのかもしれないと思った。また、学科の教員に見られているという緊張や照れもあってか、学生の感情表現が少し希薄だと感じた。互いがモデルになって表現する場合、リラックスできる環境も必要ではないかと思う。
・先生が描いて見せるのも指導だが、「よく見てごらん。ほら違うでしょ。」という気付かせるやり方をもっと取り入れて良いと思った。
・普段目にすることのない活動を見せていただいた。音楽もそうだが、造形表現と一言で言っても幅広いので、様々な可能性を見ることが楽しみである。

〈2-3 その他〉
・保育現場で子どもたちの活動として行う場合、どのようなことを大切にしながら、またどのようなことに配慮して行うことが望ましいかを、授業の最後にでも伝えていただけると、今回の授業がさらに意味あるものになるのではないかと思う。

７．３　授業全体の感想
・はっきりとした分かりやすい口調で、学生の様子を確認しながら授業展開をされていた。
・辻野先生のお人柄が十分に反映された授業で、美術の授業らしく、楽しい和やかな空気が常に流れている。
・個性の尊重、技術の伝授、個人差の把握、創造力・想像力・表現力の育成等の様々な要素が盛り込まれている授業であると感じた。
・辻野先生の、描くことへの熱意と学生の気持ちを大事にする姿やコミュニケーションの大切さ等多くのことを学ばせていただいた。
・保育現場で子どもたちの活動として行う場合、どのようなことを大切にしながら、またど

のようなことに配慮をして行うことが望ましいのかを、授業の最後にでも伝えていただけると、今回の授業がさらに意味ある活動になるのではないかと思う。
・今回の先生の授業に直接関係はないが、本学の学生は表現領域が弱いと感じている。これを何とかしたいと常々思っているが、何か良いアイデアがあれば、ご教示いただきたきたい。

７．４　授業改善に向けた意見及び考察

上記以外に検討会や授業参観記録で出された意見の中から、著者が授業改善に向けたポイントとなる項目を抜き出し、反省を含めた今後の授業展開に対する考察として以下にまとめた。

【意見①】褒める言葉について
・授業のルールとして、「うまい」「上手」という感想を禁止してみることは、面白いかもしれないと思った。保育者をめざす学生たちには、巧拙以外の基準で表現作品を評価できるようになって欲しいと思う。学生が様々な言葉で感想を表現できるようになることは、表現関係の授業に強く期待したいことの一つである。

ところで、先生が代替案として挙げていた「いいね」という感想は、学生たちにとっては、使い古された形式的な表現になっているかもしれない。「いいね」は、SNS でよく使われる言葉になっており、学生にとって「いいね」はもはや感嘆の言葉ではなく、形式的な称賛語になっているのではないかと思う。（だからこそ、本当の「いいね」を取り戻すことができたなら、とも思う）。

【考察①】

授業の最後にそれぞれの作品を鑑賞する時間を設けた。そこで学生たちから「〇〇ちゃん、うまいね！」「〇〇ちゃん、上手（じょうず）！」という言葉が交わされた。検討会の際、その誉め言葉について話題が出た。

「上手」とは、「物事に巧みなこと。てぎわの良いこと。」と書かれてある（広辞苑）が、それは、技術的な誉め言葉である。幼稚園児が色紙を貼っている、文字を書いているのを見て「〇〇ちゃん、上手に貼れたね。上手に書けたね。」という言葉で誉める場面をよく見かける。上手だねと言われると、次も上手にしなければならないといけないと子どもは思うようになる。

できた作品に対して、「上手」という言葉を使うのはどうであろうか。筆者は、この「上手」という言葉が嫌いで、作品を見て誉め言葉として使ったことがない。美術の世界で、技術的な評価があっても良いが、人並外れた超絶技巧の作品を見た時に、「上手だね」とは言わないだろう。感動する作品に対して「うまいな」という言葉は使わないだろう。つまり、見た人の中に何か型があり、それにうまくハマってその通りの行為、手際よくした行為、思っていた以上に良くできた行為を評価したと受け止めているからである。

「上手」の反対語は、「下手」となるが、「下手」が美術の世界では、決して悪いことでは

ない。「へたうま」という言葉があるように、誉め言葉でもある。味のある下手さ加減や幼児が描いたようなつたなさを武器にして表現をしている作家もたくさんいる。

では、誉め言葉として何を使えば良いのか。「素晴らしい」、「美しい」、「印象的だ」、「個性的だ」「感動した」等、誉め言葉はいろいろある。これも検討会で出た話だが、ただ、「いいねや素晴らしいだけだと抽象的過ぎる。」という指摘があった。その通りである。「いろいろな色を使っていて華やかで美しい」というような「〇〇の何が美しい。」「〇〇の何が迫力があって印象的だ！」というように、具体的な言葉を付け加えなければ、受け止める側の心に響かないだろう。気軽に「いいね！」という言葉を著者もよく使うが、上記指摘のように現代のネット社会では特に、若者が日常であまりにも気軽に使う言葉となっている。そのため、反射的な誉め言葉として軽すぎる言葉となっているかもしれない。

【意見②】この授業のねらいについて

・この授業を何のためにしているのか。技量を高める。観察力をつける。指導方法を学ぶ。等を明確にした方が良い。

・90 分という短い時間なので、本時は何をねらいとしているのかがもう少し明確であった方が良かったのではないかと思った。（技術面の向上なのか、学生個々の創造意欲の引き出しなのか、観察力の育成なのか等）

【考察②】

当該授業の目的は、等身大の人物画を描いた経験を、学生たちが将来保育士になり、幼稚園等でこの活動をぜひ行って欲しいということが大前提にあった。そのために研究授業の導入時の説明で、この授業を通して学生に体験してもらい、幼稚園での活動に繋げて欲しいことついては話をした。しかし、その後の鉛筆による下絵製作では、作業量に対して大変短い時間の中で下絵を完成させることに重きを置いてしまった。また、授業の最後に学生たちに質問した幼稚園でこの活動をする際には、どのようなことに注意をしなければいけないかという問いにも冷静に考える時間が取れず、中途半端で終わってしまった。指摘にあったように、この授業の目的が不明確であったかもしれないことを反省している。

【意見③】観察力と表現力について

・「よく見て描く」ことは基本だと思うのだが、「よく見る」とは実際にどういうことなのかを体得することが、幼児への指導時の自分の関りになるのではないかと思った。

・観察力と表現力は、造形表現教育における二つの柱のようなものであると感じた。

今回の製作活動では、学生に表現力の発揮を求めつつ、対象をよく観察することも求められていたと思う。学生としては、観察力と表現力をどのように両立（調停？連動？）させられるのか、という点で難しさを抱えていたのかもしれない（本人は自覚していなかったとしても）。というのも、よく対象を観察し、その通りに描こうとすると、自分なりの表現をどこで発揮させれば良いのかが分からなくなり、反対に、自分なりの表現をしようとすると、今

度は「もっと対象を観察しなさい」と言われる、というように。

そもそも観察力と表現力とを、二律背反的なものとして考える必然性はないと思う。しかし、二律背反に囚われている学生は、少なくないかもしれないと考える。

シンプルに「観察力」や「表現力」といっても、そこで具体的に求められていることというのは、教材によって異なるのだろうと思う。立体表現における「観察力」とデッサンにおける「観察力」はきっと違うだろうし、同じように「表現力」も違うと推測する。であれば、今回のような教材において「観察力」とは、何を、どのように、どのレベルで観察することであるのか。そして「表現力」とは、どのような点で発揮されるものなのか。こういった点の分析を行い、カリキュラムとして体系化していくことが、表現教育全体の大きなテーマになるのかもしれないと思った。

【考察③】

先日、認定こども園高松東幼稚園の記事[1)]を目にして、幼児教育の素晴らしい活動であったので紹介したい。他の園でもよく行われている行事ではあるが、「野菜の収穫」である。菜園で育てた大根を、園児たちが葉っぱを持って力を合わせて大地から引き抜く。大根は、それぞれ太さ、長さ、形も違うことに園児は気付くことだろう。そして、採れた大根を一人ひとりが観察しながら描画をする。白い大根が強調されるように茶色や青紫色の色画用紙に水彩絵の具を使って描いていくのである。その観察によって「細いひげのような根っこ」や「葉っぱの形がふにゃふにゃしている」ことを発見する。そして、採れた大根は、ふろふき大根や洋風スープに調理してもらい、最後はみんなで美味しくいただく。まさに見る、触る、匂う、聞く、味わうという自然を五感で感じ、豊かな心を育むことのできる体験となった。その体験の中に「大根をよく見て、絵を描く」という活動が入っていて嬉しい限りである。この「ものを観察して表現する」という行為について考えたい。

まず、「観察」について述べる。観察とは、興味や好奇心を持ってものを見る。そして、観察することで疑問が生まれ、どうしてそうなっているかの思考が始まり、より深く観察しようとする。また、自然や人工物を観察することによって、色や形の美しさを学ぶことができる。その力が「観察力」である。幼児教育において観察することは、気づきや考える力にも繋がる重要な行為である。

観察する度合いは、表現の度合いにもよる。デッサンのように立体物を本物そっくりに描こうとすれば、おのずとしっかりと細部まで観察しなければ、リアルに描くことはできない。眉毛やまつ毛はどのように生えているのか、手の指のしわはどうなっているのか疑問がわくと、より近づいて見なければならない。ある方向から見えるままに描くだけでなく、この形はどうなっているのか、この影ができるのはなぜかを探るためにいろいろな方向から見て把握しようとする。見て理解できなければ、触って手の感触で立体を把握することもある。それがより丹念に観察するということなのである。

今回の授業では、陰影を付けたデッサンを描くことを求めるのではなく、着彩の下絵とし

て鉛筆の線での表現とした。しかし、顔の形はどんな形をしているのか、耳のひだはどのようになっているのか、服の縫い目やしわはどこにあるのかは、よく観察しなければ、描くことができない。

指導者として、その観察を促す言葉を投げかける必要がある。著者が小学生の時に図工の授業で、生徒同士が向き合って水彩絵の具を使用して友達を描く課題の際に先生が言った言葉がある。「髪の毛は黒いからと言って絵の具の黒をそのまま使うんじゃないですよ。よく見てみなさい。茶色っぽい髪の人もいます。光が当たっている明るい所と影の所の色も違うでしょ。暗い部分の中に紺色っぽく光っている所はないですか？よく見てみましょう。」指導者が、描画者の目を向けさせるきっかけづくりとして、今でも心に強く留めている声がけであった。

次に「表現」についてである。今回、「ものを観察して描く」という具象領域の中での表現であったが、モデルを見てピカソのようなキュビスム様式で描くのも表現である。アート（ここでは広義の意味であえて使う）の世界での「表現」は、非常に多岐にわたる。言い換えれば、何でもありの世界である。美を求めるアートもあるが、美しさの基準は一つではない。決して美しいものだけがアートではない。こうでなければならないという正解もない。色を塗るための画材や造形に使う素材も自由で何を使っても良い。具象の表現もあれば、もののイメージを再現せず、心の赴くまま表現する抽象の世界もある。大地に描いていずれ消えてなくなるフィールドワーク、作家の行為そのものがアートとされるもの、現代ではネットを通して画像配信する表現もある。よって表現方法は様々である。

「ものを観察して描く」という表現は、ほんの一部に過ぎない。幼児教育において具象だけやっていれば良いわけではない。様々な素材や表現方法があることを紹介し、五感を刺激し体感させることが重要である。

指導者となる保育者自身も、そのような多様性を体感して知り、引き出しを多く持ち合わせ、懐を深くして指導してもらいたい。そして、何事にも興味を持ち好奇心旺盛で感受性豊かに過ごして欲しいと願っている。

【意見④】幼稚園でこの活動を行うにはという学生への質問について

・授業の終盤には、今回の実践を保育現場で行う場合、どのような点に留意すれば良いかを考えさせる時間があった。保育士等養成機関として極めて重要な発問である。

・授業の終盤で、今回の実践を保育現場で行う場合、どのような点に留意すれば良いかを考えさせる時間があったが、もう少し時間を取り、もっと学生から意見が出るように工夫された方が良いと思う。保育士等養成機関として極めて重要な発問であったので、その発問を大切にして欲しい

・授業の最後に、振り返りとして幼稚園等で行うことをイメージして、幼児への対応について考えるようにされていたが、最後の振り返りの時間だけでなく、製作にかかる前にもこのことを学生に投げかけておくことで、作業をしながら注意点等についても考えることがで

きたのではないかと思った。
【考察④】
授業の導入部分で「この活動は、以前実際に幼稚園で行われた。あるイベントでその作品が一堂に園内で飾られ、保護者から大変評判の良い活動であった。ぜひ皆さんも保育士になった際は、この活動を幼稚園で行って欲しい。」と伝えた。
研究授業の終わりに「作業を止めて、それぞれの作品を見てみよう。」と描いていた学生を立たせて、写真 10 のように各々の作品を鑑賞する時間を取った。そして「今回の活動を保育現場で行うとしたらどんなことに注意しなければいけないか考えてみよう。意見を言ってください。」と言って質問したが、残念ながらこれといった意見が出なかった。学生は、作業が終わったこと、研究授業という先生方から終始見られているという緊張感からの解放で集中力が途切れた様子であった。立たせたままの質問ではなく、一旦学生を集め椅子に座らせて、一息ついた後で質問をすべきであった。または、プリントを用意して記述することで振り返らせる時間を取れば良かった。改善すべき点である。

【意見⑤】この活動を幼稚園で行うための手法について
・保育の現場では主に芸術士さんによる活動として行われる内容かなと思って拝見した。
・学生にはためらいがあり、線を描くのも恐る恐る、モデルが横にいる時にも的確な修正ができないような状態で先生にとっても予想外の低レベルでやりにくかったのではないだろうか。おそらく学生より子どもたちの方が大胆に線を描き色付けすることができるのだと予想できる。
・今回、学生 4 名であれだけのスペースが必要だったとすれば、幼児であってもクラス単位だととても広い空間が必要だし、今回先生の様に指導し、声がけする大人も一人では足りない・・・それなら学生が将来保育の場で今回の 3 回の活動体験をどのように応用して取り組むことができるのか、その可能性を学生に考えさせる、あるいは先生から学生に提案していただけるといいのではないかと思った。スペースが十分ない、大きい紙が潤沢にない・・・に加えて発達段階に開きがある子どもたち多数でも取り組める何かに繋げることができるといいのだが・・・
・学生一人に画用紙一枚とするのではなく、全員が寝転がれるような大きな紙を使ってみるのはどうか。「全員で一つの作品を作ってみる」という方向性にすることで、学生が抱いている「失敗したくない」という抵抗感を和らげることができるかもしれない。
【考察⑤】
今回の活動を幼稚園で行う場合、指導者の問題、1 クラスを指導する場合のスペースの問題が大きく取り上げられた。その検討案を以下に述べる。
上記指摘にあったように、理想は一つのイベントとして芸術士さんに来て指導してもらい、保育士さんは補助でお手伝いをするとスムーズな活動ができると考える。しかし、保育士さんに経験や指導力があって、他の保育士さんが補助で付けば十分できる活動である。ま

た、以前このような活動を園で経験したことのある参観教員から、子どもと保護者で参加させて、輪郭線は保護者に描かせていたということを聞いた。そのように保護者に作業の手助けをしてもらうことも 1 つの方法である。保護者も参加となるとより広い作業スペースが必要になる。

今回の活動で使用した画用紙は、ロール画用紙の短辺 1m、長辺は成人の学生が手を伸ばしても画面からはみ出さないようにと余裕をもって長辺を 2m20 ㎝とした。また、受講者が 4 人ということもあり、十分余裕をもって図工室を使用した。

狭い作業スペースを有効活用する方法として、今回の活動を幼稚園で行う場合は、5 歳児サイズ用に画用紙の大きさ 140 ㎝×75 ㎝は欲しいところである。工夫として、4 枚の画用紙を図 1 のように仮止めし、左右に並んだペア 2 組が向き合って作業すると省スペースでできる。クラス単位でも可能と考える。

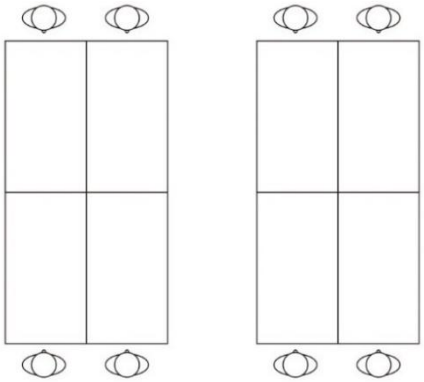

図 1　レイアウト図

今回、下絵は鉛筆、着彩は水性アクリル絵の具を使用したが、幼稚園で行う場合は、幼児が使い慣れているクレヨンを使用して、下絵も着彩も描かせると良い。ただ、活動をすることでクレヨンが衣服に付く場合もあるので、汚れても良い服装で参加して欲しい旨を事前に保護者に伝えておくべきである。

【意見⑥】画用紙の使い方について

・画用紙の表面、裏面は描画に影響するが、裏面に描かせていなかったか。

【考察⑥】

紙に描く上で裏表の質の違いは、表現の度合いにもよるが、大きく影響する場合があり、大切なポイントである。授業当日は、画用紙がめくれ上がることに意識が強く向いてしまい、画用紙の裏表まで確認せずにセッティングしてしまった。紙の種類によっては、裏表の質の差異がほとんど分からない紙もあるが、確認して表面に描かせるべきであった。

【意見⑦】鉛筆でなぞる行為について

・モデルの外側を鉛筆でなぞって描く際に、描画者が鉛筆を斜めに立てて内側に描いたり、外側に描いたりと正確さに欠けていた。身体を描かせる前に、例えば、学生個々に四つ切の画用紙等を渡し、自分の手を置いて鉛筆でなぞらせる練習をしてはどうか。

・検討会の中で提案された、基礎的な習作から段階的に取り組んでいくという方法は、理に適っていると思った。時間があれば、何か小物の輪郭を象ることから始めて、手や足を象り、最後に全身を象るというふうに、描く対象を段階的に変えていくという授業法は合理的であるように思う。

【考察⑦】

製作中に言葉で「鉛筆をできるだけ垂直に立てて輪郭線を描くように」と何度も指導したが、斜めに鉛筆を立てて描いたことで、太くなったり細くなったりとバランスが崩れた箇所が見受けられた。上記指摘のように、学生たちのあまりにも経験の少ない創作活動の中で、いきなり描かせるよりも、前もって小さな画面で簡単に表現させる練習は理にかなっているように思えた。

後日行われた連続講座（後期）の描画の際は、写真 21 のように四つ切画用紙に自分の手を置いて、自ら輪郭線を描かせる練習をしてから本番に臨んだ。結果、学生が輪郭線を描くということの理解がスムーズにできたと感じた。

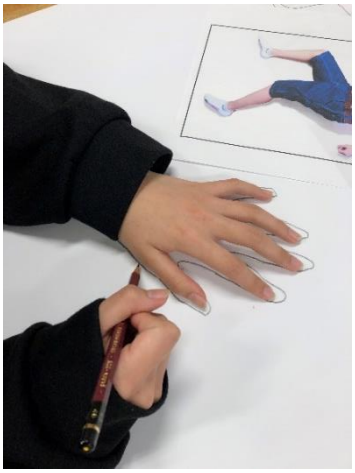

写真 21　輪郭線の練習

【意見⑧】下絵作品の提示について

・幼稚園児がクレヨンで描いた参考作品を授業の最初に提示して、その後、小学生対象のワークショップの際の画像で説明していたが、成人が描いた参考作品も見せるべきではないか。特に描いた輪郭線の内側の足が交差している所とか胸の上に手が置かれている姿を描く様子について、成人が描いた参考作品を見せるべきである。

【考察⑧】

指摘のように、学生に対する説明の際には、下絵の参考作品の提示はなく、パワーポイントで小学生が描いていく様子を見せて作業手順について説明した。過去に行った小学生対象のワークショップでの説明の際は、著者が簡単ではあるが線で描いたものを小学生の前で提示して説明した。その資料を使い、ビジュアルで見せて、どのように描くかを理解させれば良かった。

後日行われた連続講座（後期）の説明の際は、その下絵参考作品のプリント（写真 22）を見せて説明した。

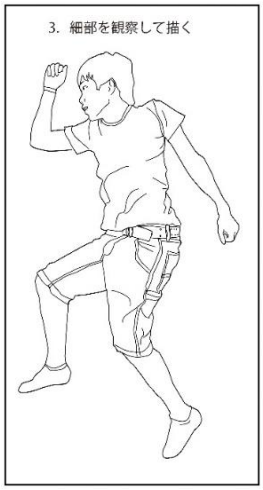

写真 22　輪郭線の参考作品

【意見⑨】正解ありきと感じる学生について

・美術の中でも表現をする際に「正解ありき」と感じ、「どうすれば良いか」を聞いてくるのが今の学生のように思う。もっと自分の表現を楽しんで欲しい。

【考察⑨】

学研教育総合研究所の小学生白書[2)]・中学生白書[3)] WEB 版の調査データによると、小学生に聞いた小学校の教科目の中で好きな教科の第 3 位に「図工」が入っている。ところが、中学生に聞いた好きな教科では、「美術」は第 8 位で、全教科の中で最大の下落幅となる。

小学生から中学生になり、「美術」は「最も人気をなくする教科」のようである[4)]。これは、やはり美術教育を指導する側に原因がありそうだ。

中学校では美術の授業で、絵を描いたり、ものを造ったりする「技術」と美術の歴史や作品等の「知識」で点数を付けて評価をすることが、未だに主流となっているようである。そして、「あの子は絵を描くのが上手だけど、私は絵を描くのが下手だから」という理由で嫌いになるのだろうか。

悲しい話だが、授業中に学生から「この作品を出したら何点くれますか」という質問をよく受ける。これは、評価する指導者側の評価基準が学生側からすると不明確なので知りたいということもあるだろうが、高い点数となる正解を得るためにはどのようにすべきかを聞いてくるのである。

美術の世界で、確かに「技術」や「知識」も必要だが、「感性」を豊かに表現する感性教育に重きに置くべきであると考える。考察③でも述べたが、本来アートは正解というものがなく自由な世界である。そして創作活動は楽しむべきものであり、心を豊かにする力がある。

著者自身も自己の反省を込めて述べるのだが、正解はないと言いながら、こうすればもっと良いという正解を学生に求めようとする指導者がいるのは確かである。だから、正解を聞こうとする学生がいるのである。

本来美術の世界は、優劣をつけるものではないはずなのだが、教科目として数学や国語と同じように美術も採点して優劣を付けて成績を出さなければいけないことが大きく影響していると考える。作品作りの中で偶然できた美しい色合いや形だけでは、優劣を付けにくい。そのために筆記試験で、過去の名画と呼ばれる作品や作家の名前を知っている、知らないという「知識」で差をつける。また、本物そっくりに描いた作品とそうでない作品では、デッサン力のある人の作品が評価を高くする傾向にある。つまり「技術」的な面に比重を置き、差を付ける傾向になってくるのである。

確かに作品を評価する際に、ただ何となく適当に描いたと思われる作品と、情熱を傾けて、丁寧に時間をかけて作り上げた作品では、見る人の心を引き付ける差は大きく、点数に影響することはある。

感性、表現力、創造力、想像力を豊かにするための美術教育であり、特に幼児教育においては、欠かすことのできない造形活動である。「絵を描くのが下手だから」という理由で美術が嫌いになったという教育にはして欲しくない。

【意見⑩】やってみることに躊躇する学生について

・今まで取り組んだことがないことだからこそ、学生は「失敗するかもしれない」と思ってしまい、挑戦してみることに躊躇してしまっている、ということは、確かにあり得そうな気がする。しかし、未経験のことに対して「失敗するかもしれない」と思う必然性はなく、「もしかしたら、上手にできるかもしれない」と思ったって良いはずなのに、とも思う。それでも多くの学生がそのように思うことができないというのは、もしかすると、学生に染み付い

てしまっている技術志向性や正解を求める姿勢とは別に、何か原因があるのかもしれない。
・自分なりの表現を指示した時、どうしていいか分からないという迷いのまま動けない学生や、出来ないから教員を頼ろうとする学生等の姿が増えてきているように思う。やってみることで得るものがあるのだということを、いかに理解させ、実践に繋げていくかが、造形に限らず様々な授業での課題だと思うが、授業参観をしながら、そのことを改めて感じる機会となった。
・これまでの学生の絵を描く経験の少なさにより、どうしていいのかが分からないため、先生が来てくれて直してもらうのを待つ学生が気になった。
・仕事をするうえでも、作品製作をするうえでも共通するのは、完成形の全体像をある程度イメージしたうえで、最初にアウトラインを描くということであろう。その意味で、デッサンは非常に重要である。授業中、先生がデッサンする様子が見られたが、学生は「先生が描いてくれてラッキー！」程度にしか思っていないのではないだろうか。とても残念に思った。
・全体像を把握する時、先生の描く姿勢はどうか、鉛筆の持ち方はどうか、先生の視線の高さはどうか等、先生が描いた「後」ばかりを観察するのではなく、描いている「過程」にも気を配れる学生になって欲しいと思った。「学ぶ」ことは「真似る」こととも関係があると思う。そのための導きが重要なのかもしれない。
・学習意欲や目的意識の希薄な学生に対し、どのような学問的刺激を与え、どのように主体的に学ぼうとする姿勢や態度を育むかは、大学教育において極めて重要な課題であるとともに、教員にとって難しい作業である。全ての教員は、教員である限りこの課題に立ち向かい続けなければならない。今後とも、先生方と授業改善について検討する機会を継続して持ちたいと思った。

【考察⑩】

心理学者の J.P.ギルフォードが挙げている「創造性の豊かな子の特徴」[5] として、「冒険を好む（失敗を恐れない）」、「自信が強い」、「人まねを嫌う（独創性を重視する）」、「変化を好む」、「達成心が強い」があるそうだ。まさに今の学生たちの多くは、この逆の特徴を持ち合わせているのではないだろうか。

また、平成 26 年に内閣府から出されている「平成 26 年版　子ども・若者白書（全体版）特集 1 自己認識」[6] によると、自己肯定感の調査では、日本の若者は諸外国（韓国・アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・スウェーデン）と比べて，自己を肯定的に捉えている者の割合が低く，自分に誇りを持っている者の割合も低い。意欲についても、日本の若者は諸外国と比べて，うまくいくかわからないことに対し意欲的に取り組むという意識が低く，つまらない，やる気が出ないと感じる若者が多いと分析されている。

マニュアルがないと行動できない若者たちを「マニュアル世代」と呼ぶようになって久しいが、「自分で考え、決断して、行動する」「とにかくまず自分でやってみる」という学生が少なくなった。授業中に「次はどうしたらいいのですか？」「分からないから教えてください」という質問や要望が大変多い。それだけに留まらず、「ここは、何色を塗ったらいいで

すか？」「かわいい色って何色ですか？」という質問まで学生から来たことがある。なぜこんな質問が出るのかが信じられず、あっけにとられたことを覚えている。

そのような質問をしてくる学生に理由を聞いてみると「失敗したくないから」という言葉が返ってくることが多い。自分で決められない。自分の感性を信じられない。正解がどこかにあるはずなので人に聞く。自分はこうではないかと薄々思っているのだが、とりあえず人に聞いてそれが正解かどうか確認しようとしているように思える。

どのような職種でも自分に自信のある人は、やはりいろいろな人生経験をしている。空間、時間、人間関係等、成功体験ばかりではなく失敗し、挫折し、それでも乗り越えられたことが強みとなる。自信のない人に自信を芽生えさせるには、経験値を増やしていくしかない。それも成功体験だけでなく、失敗体験も積み重ねて乗り越えた経験が必要である。

終わりがあってないのが、創作活動の世界である。作品を作ってこれで良し、完成だということを決めるのは、作者自身である。その決断を他人が決めることではない。そういう意味では、創作活動は自分で決断できる世界であり、小さな躓きから工夫をして乗り越えていく経験が得られる素晴らしい活動である。特に立体物を作るものづくりでは、行き当たりばったりではロスが多くなるために計画性も必要になる。学生に創作活動を通して思考と決断と実行という経験を積み重ねてもらいたい。

７．５　今後の授業「友達を描く」の改善案

上記の意見及び考察から、今後行う「友達を描く」の授業改善案について以下にまとめた。

・画用紙の裏表を確認してセッティングする。

・初日のパワーポイントで授業説明する際にこの授業のねらいについて明確に提示する。

・下絵を描く作業手順の説明では、参考作品を提示する。また、輪郭の描き方として、4 つ切り画用紙に自分の利き手でない方の手を置いて、できるだけ上から見ながら鉛筆を垂直に立てて輪郭を描く練習をさせる。

・今回の活動を保育現場で行う場合、どのような点に留意すれば良いかを考えさせるためにプリントを配って記述させる。

８．おわりに

昨春（2021 年）に高松短期大学・保育学科に赴任して、初めて行った連続講座の課題であり、研究授業、検討会であった。この貴重な機会を得て、授業を振り返ることができた。

保育現場で幼児に対して行う活動をそのまま大学生に行う授業もある。しかし、今回の課題のように幼稚園では、このように指導をすべきだが、学生にはこの材料でこう表現して欲しいという大学生用にアレンジした活動もある。手の込んだ作品、時間をかけた作品だけが良いわけではないが、大学生が目指す作品レベルが、保育現場で行うのだから、5 歳児レベルで作れば良いというような、こだわることもなく安易な気持ちで適当に作ってできたという作品が別の授業で見受けられたことがあったからだ。

また、造形活動が技術志向に向かうことが良くないことも理解している。自らの感じ方や考えで自由に表現し、完成させることの大切さも味わって欲しい。そのような葛藤の中で授業展開していた。今回の研究授業、検討会によって、著者自身の一方的な考えのもとで授業展開していたことに対して、第三者からの意見を聞くことで、多くの課題、疑問点、指摘事項により反省すべき点、改良すべき点が見つかり、改めて授業がどうあるべきかを見つめ直す良い機会を得ることができた。

今後も造形活動が楽しく思える授業内容、保育現場で活かせる授業、幼児の発達や活動をサポートできる指導者を育てることに対して常に疑問を持ち工夫し、改善しなければいけないことの確認ができた。

謝辞

本研究授業及び連続講座に協力していただいた受講生、並びに研究授業を参観していただき、検討会や参観記録で貴重なご意見をたくさん下さった先生方、授業計画・実施において注意すべき点や今後の授業の方向性が見えてきました。心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

１）四国高松学園だより　第 131 号掲載記事　認定こども園高松東幼稚園ニュース
２）学研教育総合研究所の小学生白書 WEB 版
https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/202108/chapter8/01.html
（2022.7.27）
３）学研教育総合研究所の中学生白書 WEB 版
https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/j202008/chapter8/01.html
（2022.7.27）
４）「13 歳からのアート思考」　末永幸歩著　ダイヤモンド社
５）大阪大学人間科学部人間科学研究科教育コミュニケーション学研究室
http://edcom.hus.osaka-u.ac.jp/lj_everyday_petit_024.html（2022.7.27）
６）内閣府　平成 26 年版子ども・若者白書（全体版）特集 1 自己認識
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/tokushu_02.htm（2022.7.27）

参考文献

・「造形表現　理論・実践編」　花篤實/他 編著　三晃書房

添付資料

令和 3 年度研究授業　指導案

令和３年度研究授業　指導案

「保育職基礎演習Ⅱ」　連続講座　前期１回目

造形表現「友達を描く」①

担当：辻野　栄一

◇日時：令和３年11月２日（火）５校時　16：20～17：50

◇場所：２号館１階　2104図工室

◇本時のねらい

課題説明により概要と全体の作業手順を理解する。

友達とのコミュニケーションを取りながら画面いっぱいに動きのある魅力的なポーズを見つける。

大きな画面で鉛筆を使って体を動かし、いきいきとした力強い線で線描画を描く。

モデルをよく観察し、詳細を克明に描く。

◇使用教材

ジャンボロール画用紙、鉛筆（4B)、消しゴム

時間	内容	指導上の留意点・配慮事項
	＜準備＞ 机を移動して床面を空けて広いスペースを作り、ブルーシートを敷く。 人数分２m20㎝に切ったロール画用紙を等間隔に空けて置き、マスキングテープで仮留めをする。	・準備物／ブルーシート、ジャンボロール画用紙、鉛筆（４B)、鉛筆削り、マスキングテープ
16：20	**○導入** ・幼稚園児が描いた参考作品を見せる。 **○課題説明** ・立ち姿を写生するのではなく、友達がポーズを取っている姿そのものの輪郭を描く等身大の作品であることを伝える。 **○作業手順の説明** 同じテーマで過去に小学生に対してワークショップを行った画像を見せながら作業の流れや注意点を説明する。 **○課題の長所短所の説明** **○本日の作業の確認** **○本日の目標**	・体調確認 ・PPTで課題の説明 ・幼稚園で保護者からも大変評判の良かった課題であることを伝える。 ・体を動かし大きな画面に描くため迫力がある作品となる。 ・お互いコミュニケーションが取りながらポーズを決める。 ・今日は鉛筆で下絵となる線描画を描くことを伝える。

	○連続講座 3 回の流れを説明	・連続講座 3 回を通して完成とする。
16：35	**○作業開始**	
	① 2 人のペアを組む。(A.B)	・学生の話し合いによりグループ分けをする。
	② 鉛筆を渡す。	
16：37	③ A がモデルとなり、紙の上で寝転がりポーズを決める。	・できるだけ動きのあるポーズを決めさせる。
	④ 鉛筆で B がモデル A の輪郭を描いていく。	・顔の向きも工夫させる。
16：48	**＜描画者・モデルの役割交代＞**	・3 週に分けて描くので、モデルの写真をそれぞれ撮っておく。
	⑤ モデル B がポーズを決め、 A が輪郭を鉛筆で描いていく。	・鉛筆でできるだけためらわずに力強く輪郭線を描く
	＜描画者・モデルの役割交代＞	
17：00	⑥ モデル A は、画面の横にずれて先程と同じポーズを取り、B は、それを見ながらまずは、顔から下の手足の詳細、服装の柄やしわ等を克明に描く。そして、頭部の目・鼻・口・耳・髪の毛等をよく観察しながら描く。	・B は、コミュニケーションの中で先程と同じポーズを A に取らせる。 ・衣服等の詳細をよく観察して克明に線で描く。時間があれば顔の詳細や髪の毛を描く。
	＜描画者・モデルの役割交代＞	
17：15	⑦ モデル B は、画面の横にずれて同じポーズを取り、A は、それを見ながらまずは、顔から下の手足の詳細、服装の柄やしわ等を克明に描く。そして、頭部の目・鼻・口・耳・髪の毛等をよく観察しながら描く。	・A は、コミュニケーションの中で先程と同じポーズを B に取らせる。 ・衣服等の詳細をよく観察して克明に線で描く。時間があれば顔の詳細や髪の毛を描く。
17：30	⑧ 今日行った授業展開についての感想や幼稚園等で同様の課題をやることに対して学生に質問する。	・前に集まり、難しかったこと、大変だったことを聞き出す。 ・この課題を幼稚園等で行うことをイメージさせ、幼児に対してどのようなことに注意を払うべきか等を考えさせる。
17：40	⑨ 後片付け	
17：50	**○終了**	